SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

明治初年の苗字の発音と連濁・非連濁について：平民苗字必称義務令以前に出版された『単語篇』を利用して

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026269

明治初年の苗字の発音と連濁・非連濁について
―平民苗字必称義務令以前に出版された『単語篇』を利用して―

城　岡　啓　二

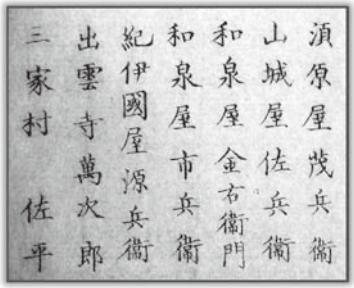
０．筆者のこれまでの明治期村名の連濁調査を出発点として

筆者は、これまで、内務省地理局編（1885）の『地名索引』ではじめて詳細に記録された全国の明治期村名の発音をもとに、地名の連濁・非連濁の調査を前項の拍数別に続けてきた。城岡（2017）は前項が３拍（長めの前項）の村名の地名を調査対象とし、城岡（2018a）で前項が２拍のもの（標準的な長さの前項）を扱い、城岡（2018b）は前項が１拍のものを中心に考察した。これで、地名複合語の前項が長いものから短いものまで、地名だけを扱った筆者の連濁調査はいちおう終了したが、地名と関連の深い日本人の苗字の考察が残されており、『地名索引』と比較できるような、明治初期の適当な資料を探すことになった。目的に合致する規模の資料は見当たらなかったが、明治５年に文部省が出版した小学校国語教材の『単語篇』に「苗字略」が含まれていた。当時の出版状況では各地で復刻版やフリガナを振ったような参考書が出版されていて、同一の苗字の発音を示す発音資料が複数あり、データを効率的に収集することができた。本稿では、これまでとくに注目されたことのなかった『単語篇』の「苗字略」と収録されている苗字についてやや詳しく解説したうえで、「苗字略」の各苗字の発音を示す資料を６冊調査し（２．３の２拍前項をもつ２字苗字の集計と末尾の付録は４冊の調査で行い、２．４の途中からの考察には別の２冊の追加発音資料も利用した）、日本人の苗字、とりわけ、庶民が苗字を本格的に使いだす以前の時代の発音を反映していると思われるが、日本人の苗字の連濁・非連濁をこれまでの地名研究で明らかになった種々の音韻条件をもとにデータを分析し、考察した。この内容をもとに、現代まで一貫している苗字の連濁・非連濁についての特徴や通時的変化について論じた。また、本稿の関心は、地名との共通点や違いにも向かっており、苗字と地名の連濁・非連濁やその他の特徴を比較する内容になっている。

１．明治初年の苗字の発音と『単語篇』

明治初年の日本人の苗字の状況は大きく変わる。『単語篇』の編集と出版は、平民苗字許可令（明治３年太政官布告第608号）のあととはいえ、日本の大多数の庶民は、苗字があったにせよ、公称はしていない時期が続いていた。『単語篇』の復刻版が各地で出版された時期には、平民苗字必称義務令（明治８年太政官布告第22号）も出されることになる。また、この時期には、苗字の改称が禁止され、親子で別の苗字を名乗ることなども禁止されている。

平民苗字許可令と平民苗字必称令に挟まれた明治５年に文部省が編纂した『官版単語篇三』の奥付に「発兌書肆」として印刷された出版業者名を見ておこう（[図１]）。すでに平民でも苗字を名乗ることができたが、７人の出版業者が名前を連ねているが、ほとんどが屋号で、苗字らしいのは「出雲寺」と「三家村」だけである。『地名索引』（内務省地理局編）や「旧高旧領データベース」（国立歴史民俗博物館）によると、「出雲寺」は幕末から明治初期の村名には存在せず、すでに苗字として使われていたと思われるが[1]、「三家村」の場合は、「旧高旧領データベース」では遠江国豊田郡と美作国真島郡に村名があり、『地名索引』では豊田郡の「三家（ミツイヘ）」だけになっている[2]。したがって、出身地の村名をあげただけで、苗字という意識はなかったかもしれない。現代の電話帳に登録されている苗字で判断すると[3]、「三家村」という苗字はなく、「三家」なら苗字として使われている。



[図１]『単語篇』の出版業者名

１．１　明治初年の小学校教材の『単語篇』

文部省が設置される前は大学という名称の機関がこれに相当していて、大学南校や大学東校といった中等教育機関の運営母体でもあった。明治４年に文部

---

[1]「出雲寺」は主に明治期以前の苗字について記述している太田（1974）に記載があるので、明治期以前に成立していた苗字である。

[2]「旧高旧領取調帳データベース」ではどちらの村名も「みつえ」という発音になっているが、フリガナは後の事典類を参考に付けられたものなので、記載された発音の信頼性はあまりないだろう。

[3] 電子電話帳の応用ソフト「写録宝夢巣」を発売して、苗字の調査を趣味にしている好事家に注目された日本ソフトは、企業ホームページ上で全国及び各都道府県の苗字の分布やランキングを調べられるようにしている（https://www2.nipponsoft.co.jp/bldoko/index.asp）。

省が設置された。『単語篇』は、「明治五年に文字あるいは語彙教育のために、文部省によって最初に編纂され」（高木 1993：148）たものである。

明治初期の小学校の国語教材は、国学系の『小学読本』とアメリカの小学校教材をもとにした『小学読本』の２種類があったが、高木（1993：148）によれば、『単語篇』の方が『小学読本』よりもはるかに普及していたようである。

『単語篇』は分冊一から分冊三の三冊に分かれ、分冊一の冒頭で、ひらがなとカタカナと動詞の活用の種類があげてあり、その後、濁音や半濁音も学習することになっている。半濁音としてパ行だけでなく、ガ行も入れており、点一つの濁点をこれに使うことになっている。今回調査した『単語篇』の発音資料でもこの濁点ひとつでガ行鼻濁音を記載していると思われるものが１冊あったが、全国的にガ行鼻濁音が使われていたわけでもないのに、ガ行の濁音と半濁音の区別を導入しようというのはかなり無謀な方針であるが、できたばかりの文部省だからこそできた冒険だったのかもしれない。ひらがな、カタカナの列挙や半濁音や濁音などは、いわば導入部で、その次から本編が始まるが、意味分野別に漢字の語彙を列挙する語彙集になっている。本編の冒頭は、「数」「方」「形」「色」「度」「量」「衡」「貨」のようになっており、それぞれの意味分野の語彙が書かれいる。同じ意味分野でも基本的なものと高度なものを分けるつもりもあったようで、「人倫」は分冊一にも、分冊二にもあったが、前者では、「天子」「華族」「士」「卒」から始まって「農」「工」「商」まであげ、細分化された身分の違いを教えようとしている意図が感じられる内容である。後者では、「高祖父」「高祖母」など家族関係の語彙から始まって、「騎兵」、「歩兵」、「医」、「卜」、「僧」、「尼」までである。「騎兵」や「歩兵」などが早くもあがっていて、すでに、兵役[4]を念頭においていたことが分かる。「色」についても分冊一と分冊二に色彩語が集めてあるが、基本的な色彩語を集めたというよりは、著者が知っているものをすべてあげたようで、色彩語が合計23語もあげられていて、初級語彙と中級語彙にゆるやかに分けて分類したようなものであったようだ。当時の文部省の人間には何が基本的で、何が生活や勉学に必要不可欠のものかなど、あまり分かっていなかったのではないかと思う。

---

[4] 明治８年の平民苗字必称令以前の状況として、兵役の事務や受刑者の管理など、徴税管理と並んで、平民の苗字不使用が問題になっていたようだ。井戸田（1986：54）によると、1875年１月14日陸軍省から太政官に「現今尚苗字無之者モ有之兵籍上取調方ニ於テ甚ダ差支」るという伺いが出され、東京府から同一監房の受刑者が無姓同名で取扱いに困るという伺いが出されているのだという。近代国家を作るための前提として苗字がない者をそのままにしておくことはできなかったようだ。

1．青、黄、黒、白、赤、紫、緑、鼠色、萌黄、花色、茶色、柿色、紺、浅黄、鳶色、桃色（『単語篇一』16語）。紅、鴇色、鶸色、朽葉色、藤色、蒲色、飴色（『単語篇二』７語）。

幕末の開成所で出版された『英吉利単語篇』(1866）でさえ、次の15語の色彩語をあげているだけであったことを考えると、張り合う意図でもあったのだろうか。

2．Red, Blue, Yellow, Black, White, Green, Brown, Violet, Orange-yellow, Indigo, Purple, Grey, Flesh-colour, Scarlet, Carmine（15語）

１．２　『単語篇』に含まれる「苗字略」

文部省編の『単語篇三』の内容は、神武から孝明を経て今上までの「歴代帝號」と大化から明治までの「年號盡」と「苗字略」の三つであるが（復刻版には他に付録がつくことがあったようで、田中編（1875）には「府名」と「縣名」が付けられている)、覚える必要もなく、先生のあとで発声していくだけでよかったのかもしれないが[5]、児童の発達段階を考慮に入れているような教材ではなかったようである。なお、「苗字略」は当時出版された『単語篇』の類似書にすべて含まれていたわけではなく、高木（1993：149）のまとめた表を見ると、『単語』(秋田県学校編）にも、『女単語篇』(島次三郎編）にも、『傍訓単語篇』(浦野鋭翁編）にもないようで、文部省編の『単語篇』か、それを忠実に復刻したもの（当時の教科書は、各地で復刻して利用された）だけが「苗字略」を含んでいたようである。

さて、「苗字略」に収録されている苗字の数は合計413であるが、編集ミスがあり、「津田」が２回収録されているので、412が収録苗字数ということになる。『単語篇』がまとめている苗字は、華族と明治維新期に有名になった士族階級の苗字が中心であるようだ。

412種類の苗字のうち、３字以上の苗字は、次にあげる52である。

---

[5] アーネスト・サトウが駿府に立ち寄って、藩校の教育を見学したときのことが『一外交官の見た明治維新（上)』(坂田精一訳、岩波文庫）にあるが、「一室に三十名ほどの若者がすわって、漢書の写本を前にし、年長の上級生の口について暗誦していた。このような授業を毎朝二時間ほどやり、また教師が月に六回教科書の解釈をやるという。校長は江戸の昌平黌から来ていて、一年ごとに交代することになっていた。こうした勉強に、毛筆の習字を加えたものが、当時は年少の日本人の教育となっていた。」(上：286)。明治初年の小学校教育も大差のないものだったのではないだろうか。

3．西園寺、徳大寺、三条西、正親町、綾小路、滋野井、姉小路、清水谷、押小路、飛鳥井、中御門、持明院、日野西、三室戸、北小路、甘露寺、勧修寺、清閑寺、梅小路、油小路、水無瀬、富小路、蜂須賀、大久保、喜連川、小笠原、慈光寺、佐々木、東久世、後醍院、東坊城、美濃部、西洞院、多々良、大須賀、佐久間、多賀谷、土御門、錦小路、甲斐荘、太田原、久留島、西大路、花山院、大河内、伊地知、西四辻、武者小路、大炊御門、万里小路、長曽我部、勘解由小路。(「苗字略」の記載順)

このリストには多くの公家の苗字が含まれている。明治初年に公家と諸侯を合わせて華族としたが、諸侯の苗字もありそうだ。残りは、「美濃部」「多々良」「佐々木」「大須賀」「佐久間」「多賀谷」「甲斐荘」「伊地知」「長曽我部」ということになる。「伊地知」という珍しい苗字も入っているので、「苗字略」の苗字の編集方針がうかがわれる。伊地知正治[6]という元薩摩藩士は、戊辰戦争に功があったとされている。その人の苗字が華族の苗字に加えられていということは、公家や諸侯などの苗字だけでなく、明治維新から明治初年にかけて勲功をあげたひとが入っているということになる。明治維新後の王政復古では、参議という役職が重要になったが、参議が廃止されるまでに26人が参議に就任しているが、そのうち、伊地知正治を入れて下記の18人の苗字が含まれていたのは偶然ではないだろう。

4．副島種臣、大久保利通、佐々木高行、木戸孝允、大隈重信、西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎、大木喬任、江藤新平、伊藤博文、寺島宗則、伊地知正治、山県有朋、黒田清隆、西郷従道、井上馨、福岡孝悌（参議として古い順)。

52の３字以上の苗字で残るのは、過去に有名だった武家の苗字ということになるようだ。「長曽我部」は四国の覇権を豊臣秀吉と争った一族で、傍系が明治初年にこの苗字を復活させているが、リストにあったのは、秀吉と争って、処断された「長曾我部」氏の武勇のためだったと思われる。そうなると、残りの「美濃部」「多々良」「大須賀」「佐久間」「多賀谷」「甲斐荘」も名の知られた武家

[6] 珍しい苗字であるし、発音も複数あるようで、『単語篇』の発音資料のうち２冊はイヂチ、別の２冊はイチチとしている。『地名索引』によると、伊地知村は越前国大野郡にしかない村名でイヂチであるが、イチチやイチヂという苗字の発音もあるようだ（日本ユニバック編 1978：表記編227-228)。伊地知正治は、元薩摩藩士で、明治20年には伯爵になっていて、いわゆる新華族ということになる。

か、明治初年にすでに勲功のあった武家ということになりそうである。「佐久間」は佐賀の乱や西南戦争に出征した佐久間左馬太がいるし、「大須賀」なら徳川家康のもとで遠江横須賀の大名になっている大須賀康高がいる。「多賀谷」なら多賀谷城を着築いた武将がいたようだ。「甲斐荘」は、室町時代から江戸時代に活躍した武家だったようだ。

要するに、「苗字略」の苗字は、公家の苗字に諸侯や有名な武家と維新後に勲功のあった武家の苗字ということになるだろう。現代の日本人一般の苗字として見るなら、かなり特殊な部類にはいる苗字を寄せ集めたものと言える。当時の小学生にこのような苗字を無理に教える意味はどの程度あったのだろうか。３字以上の苗字で確認したことは２字以下の苗字にもあてはまり、公家の苗字などはかなり網羅されているようである。「河鰭」も「池尻」も「米津」も「石野」も公家の苗字だが、「池尻」と書くイケガミだけでなく、「河鰭」をカハ（ワ）バタと読むのはとても難しいし、「米津」と書くヨネキヅ、「石野」と書くイハ（ワ）ノなども例外的な特殊な読みをしており、子供が最初に学ぶべき内容だとは思えない。子供どころか、教養層に属したはずの小学校教材の編者にも読めない場合がかなりあったことを付け加えておくべきであろう。『単語篇一』の「人倫」では「天子」、「華族」が最初にあり、「華族」を特別なものとして教えようとする意図があったと思われるので、このような苗字を中心にリストをまとめたのは当然であったのだろう。

日本人の苗字の最多数派の２字苗字のうち、現代の日本人でよく使われている苗字の200位以内[7]で、「苗字略」の412種類の苗字に入っていないものを調べておくと、半分以上の113が含まれていなかった。この中には、新旧華族の苗字ではなく、庶民に多い苗字が含まれていると思われる。人口の多い順に113の苗字をあげると、以下の通りである。

５．小林、山田、斎藤、松本、山下、中島、長谷川、村上、近藤、坂本、西村、福田、藤原、原田、小野、金子、斉藤、石田、森田、柴田、原、工藤、宮崎、宮本、谷口、大野、高田、丸山、今井、河野、藤本、村田、杉山、増田、大塚、菅原、久保、松井、野口、松尾、菊地、新井、渡部、杉本、大西、古川、島田、市川、吉川、山内、西田、浜田、西川、菊池、北村、五十

[7] 調査には城岡啓二・村山忠重の「日本の姓の人口順のデータ」（2011年から静大HPで公開していたもので、個人HP閉鎖後の現在、静岡大学学術リポジトリで公開）の200位までのデータを用いた。

嵐、安田、中田、平田、川崎、飯田、東、本田、久保田、福島、中西、岩田、服部、辻、川上、山中、森本、矢野、石原、大橋、吉岡、荒木、小池、熊谷、野田、広瀬、川村、星野、大谷、沢田、尾崎、田辺、小沢、永田、松村、菅野、西山、大島、岩本、片山、横田、早川、荒井、鎌田、小田、成田、宮田、大石、石橋、篠原、高山、須藤、小西、栗原、松原、福井、南、奥村。(『単語篇』に不採用の、現代の使用人口の多い苗字)

1.3　フリガナの付いた『単語篇』

『単語篇』自体が序文も説明もない教材で、仮名を付けた『単語篇』にも序文も説明もないものなので[8]、仮名が付いたものが小学生の教材だったのか、参考書のようなものだったのか、はっきりしない。のちに明治期を通して各地で多くの種類が出版された『小学読本字引（字解)』のようなものは、「字引」や「字解」と言っても辞書のようなものではなく、教材に出てくる順番で教材中の比較的難しい漢字で書いた語（漢語や和語）にフリガナを振って、訓読みと音読みを教えたり、他の和語や漢語の言い換えで説明したりするものだった。『小学字引大全』(飯田正宣・太田幹・緒方益井・多湖安貞同輯、有済社蔵板、明治九年二月）は、小学読本巻三之部から始まるが、冒頭で解説しているのは「動物」と「植物」である。「ドウブツ」と「シヨクブツ」とフリガナを振り、それぞれ、「イキモノ」、「クサキノソウメウ」と説明している。教材自体にはフリガナがなく、フリガナを付けることが参考書の果たす使命になっていたようである。したがって、仮名の付いた『単語篇』も参考書として出版されたものだったかもしれない。

仮名が付いた『単語篇』がまとめている苗字の読み方は、苗字が華族階級の苗字が中心であるなら、読み方もやや特殊なものが混じることも考えられる。苗字ではなく、下の名前に特殊な発音を使うことが江戸時代後期から公家社会で流行したらしいが、これは公家訓みと呼ばれ、角田（1988：13-20）は、「江戸時代後期の公家社会において諱に用いる漢字を独特に訓む風が普遍化した」と述べ、「おそらく武家に対する公家の優越性の証として考え出されたものだろう」と説明している。「慶子」と書いて「よしこ」、「愛子」と書いて「なるこ」と発音するようなものであるが、苗字の方にも特殊な発音を使うことが見られたようで、「池尻」と書いてイケガミと発音したらしく、難読苗字として知って

[8] 追加発音資料として利用した２冊の『増補単語篇』は、おそらく参考書として出版されたのだろう（２.１参照)。

いなければ分からない発音である。藤裔会編（1991：23、272）では、「池尻」だけでなく、「町尻」についても「『まちがみ』と訓ズ」と書いているので、「町尻」も「池尻」と同様の発音がかつて使われていたことがあるのだろう。今回の本稿の調査では、合計６冊の発音資料を使ったが（２．１で詳述）、「池尻」をイケガミと読んでいるものは２冊、イケカミとしているのが１冊だったが（残りの３冊は華族の池尻家の読み方をイケジリと間違って読んでいた）、「町尻」は５冊がマチジリ、１冊はマチシリと仮名を付けていた。Wikipediaの「日本の華族一覧」では、明治17年に子爵に叙勲された池尻知房が「いけがみ　ともふさ」と仮名をつけられ、同年にやはり子爵に叙勲された町尻量衡の方は「まちじり　かずひら」になっており、町尻家では苗字の読み方をマチガミからマチジリに変えていたようである。

「苗字略」に発音を付した資料は、「池尻」のような特殊な発音が混入している可能性があるし、明治初年の官員録に含まれる役人の苗字でも未掲載のものが多い。しかし、他にこれだけの規模の日本人の苗字の明治初年の発音資料があるわけではないので、苗字の発音資料としては貴重なものと言えるだろう。

２．明治初年の苗字の連濁・非連濁の傾向

明治初年にどんな苗字があったかということは、『官員録』（公務員名簿）の苗字を調べてもある程度分かるだろう。また、太田（1974）のような姓氏辞典に収録されているのは主に明治以前に成立した苗字だと思われ、どんな苗字があったかを調べるのは難しくないだろう。しかし、表記形が分かっただけでは苗字の正確な発音は分からないし、連濁・非連濁の差異は、漢字表記では現わされないので、どちらか判断することができない。２では、苗字の連濁・非連濁について『単語篇』の「苗字略」の発音資料を利用して分析し、筆者のこれまでの明治期村名調査の結果と比較する。

２．１　連濁・非連濁の調査に利用した「苗字略」の６冊の発音資料

『単語篇』の「苗字略」の発音の調査にあたって、まず、４冊の資料を利用した。『仮名附単語篇』（河上編 1875）、『仮名単語篇』（山涯編 1873）、『音訓仮名附単語篇』（田中編 1875）と詳細不明で誰かが書き込みをした『単語篇三』である。最初の二つは国立国会図書館デジタルコレクションにある。あとの２冊は架蔵本であるが、最後のものは京都の古書業者から入手したものであるが、題せん欠で発行者も発行年も記載がなく、詳細不明である。この詳細不明本はほ

ぼ漏れなくフリガナがついており、他の３冊と同一の書き込みではないので、発音資料としての価値はあるものと判断して、調査対象に加えることにした。

じつは、国立国会図書館デジタルコレクションの『単語篇』には、他にもフリガナの付いた『単語篇』がある。変体仮名の崩し字でフリガナの付いたものもあるが、『増補単語篇』という種類のものも２冊あるようだ。赤澤（1875）と奥川（1875）である。不覚にも気付くのが遅かったこともあるが、本稿では、追加発音資料として、174の連濁可能後項をもつ苗字の集計には用いず、集計に基づいた考察の部分で追加発音資料として用いている。

追加発音資料の２冊だが、「増補」というのは、文字通りの意味で、元の『単語篇』の語彙を増やしている。「苗字略」からの例をあげると、たとえば、１．２で確認したように華族以外では明治初年に活躍した士族階級の苗字がとられていると述べたが、王政復古後の明治政府の参議には薩長土肥以外では勝海舟が唯一任じられているが、元の『官版単語篇』からはどういうわけか「勝」が落ちていた。赤澤（1875）は、この「勝」や自分の苗字の「赤澤」も含めて増補している。自分の苗字を入れるぐらいはユーモアと解することもできるが、やや編集が杜撰だったようで、増補と言いながら、「岡崎」だったものが「岡野」に変わっていたり、「高島」が消えてしまったりと、『単語篇』の「苗字略」にあった苗字が幾つか落ちてしまっているようである。２冊の『増補単語篇』は、参考書として作られたことが明確で、赤澤の凡例には「此篇ハ専ら童蒙児女ノ輩漢字ヲ解得スルヲ能クセザル者ノ為ニ輯録スル所ニシテ」とある。

２．２　「苗字略」の漢字２字の苗字の連濁可能後項をもつ苗字一覧

連濁という音韻現象は複合語に起きるものなので、漢字１字の苗字は対象にならない。漢字３字以上の苗字は、少数派であるし、「苗字略」に多い華族の苗字では、「～小路（コウヂ）」では、後項にすでに濁音を含んでいるため、連濁はあり得ないし、助字のノを含むものも「天の川」のような例外もあるが、一般に非連濁傾向が強く、「甲斐荘」なら「カヒノシヤウ」と非連濁が普通で、わざわざ調査する意味もあまりない。また、３字以上の苗字の場合、最後の１字が複合語後項だという単純な分析もできない。ということで、２字を超える苗字は、個々の例について触れることはするが、基本的な調査は２字苗字で行うことにした。そうなると、漢字２字で、連濁可能後項をもち[9]、調査対象となる

[9] 連濁可能後項をもつ苗字と判断する際には、前項と後項に分割できそうにないものや、どこから後項か判断できなかったり、分析が難しかったり、あいまいな苗字は除外した。「錦織」は調査

苗字は、以下の合計174の苗字だった。漢字は文部省が出版した『官版単語篇』で使われているものをできるだけ再現した。たとえば、「島」は発音資料の方では「嶋」が使われたり、「島」が使われたりしていて、同じではない。なお、連濁可能後項の判断と選別にあたっては、和語に限定していない。苗字では、地名に比べて漢語の割合が高いし、藤原氏から派生した「～藤」など、後項が漢語のものが多数含まれている。２．３の集計では、２字苗字で２拍前項のものを対象にしたが、リストでは、対象となる苗字の右肩にアステリスクをつけて示している。

６．鷹司*、醍醐*、菊亭*、小倉、河鰭*、梅園*、風早*、中園*、難波*、今城*、東園、壬生、六角*、冷泉*、藤谷*、廣橋*、柳原、池尻*、岡﨑*、山科*、松﨑*、櫛笥*、町尻*、高倉*、堀河*、樋口、本多*、藤田*、高木*、八代、本荘*、富田*、吉田*、小幡、大淵*、奥平*、武藤、那須、佐藤、松田*、後藤、内藤*、成瀬*、皆川*、蒲生*、新荘*、板垣*、土方*、江藤、副島*、寺島*、山口*、伊藤、徳川*、松平*、細川*、一色*、保田*、渋川*、宍戸*、武田*、多田、上田*、安藤*、島津*、佐竹、大澤*、太田*、土岐、池田*、庭田*、大原*、大木*、伊丹、松下*、朽木*、高島*、京極*、黒田*、尼子*、小島、岩倉*、千種、久世、梅渓*、萩原*、那波、北畠*、福羽*、白河*、廣幡*、唐橋*、前田*、大隈*、船橋*、伏原*、小畠、岩﨑*、梶原*、千葉、正木*、織田、津田、梶川*、杉原*、遠藤*、戸澤、小栗、仁科、岩城*、錦織、倉橋*、秋田*、秋月*、堀田*、鈴木*、木戸、山﨑*、石川*、横瀬*、朝倉*、稲葉*、内田*、望月*、真田*、蜷川*、岡田*、坂田*、井戸、青木*、小川、川口*、高橋*、田口、長鹽*、丹羽、益田*、田尻、大給*、鵜殿、中川*、柳澤、鳥飼*、稲垣*、生駒、蒔田*、片桐*、森川*、柳生*、米倉*、大関*、米津*、保科、仙石*、竹腰、板倉*、五島、伊東、九鬼、市橋*、桑原*、花園*、諏訪、松木、鍋島*、戸田、立花*、榊原、脇坂*、津軽、溝口*、加藤、山縣*、和田。(『単語篇』の出現順)

資料４冊でニシゴリ、１冊はニシゴホリ、１冊はニシギゴリとなっており、後項として「ゴリ」が設定可能で、現代ではニシコリという発音もあることも考慮に入れ、「ゴリ」は連濁形と判断して、調査対象に含めた。他にもあいまいな苗字のいくつかは除外することにした。「愛宕」もアタゴ以外にヲダキとヲタギとする資料があり、ヲダキがヲ＋ダキのように分割という可能性も皆無ではないだろう。「設楽」の場合は、シタラが４冊、シダラが２冊だったので、非連濁形と連濁形と見ることもできそうだが、漢字の通常の読みとの関連で明確にシ・タラやシ・ダラに分かれるとも言えないので、調査対象からは外した。「長谷」を「ハセ」と発音する苗字の場合も、「ハ」と「セ」への分割は自明ではなく、連濁・非連濁の対象語とする判断はできなかった。

174の苗字の４冊の発音資料の記載内容は、末尾の付録にまとめてある。

２．３　連濁に関与する種々の音韻条件

筆者の行った明治期村名調査では、前項末の音韻条件によって地名の連濁傾向がかなり左右されることが分かっている。調査対象の２字の苗字で、前項が２拍のものは、６の174の苗字のうち124あったが、これを対象に、連濁傾向を左右する前項末の音韻条件別に連濁率を調べたのが［表１］である。なお、連濁数として数えたのは４冊の発音資料中３冊以上で連濁していた苗字数であり、非連濁数も、同様に３冊以上で非連濁だったら非連濁として数えた。ゆれ数の方は、それ以外だが、特殊な場合を除くと、２冊ずつ別の判断になっていたような苗字ということになる。特殊な場合というのは、発音が読み取れない資料があったり、二つの解釈があったりした場合などがあるが、そうした場合の判断としては、多数派に従って、連濁と非連濁を判断している。

［表１］　連濁を抑制・促進する音韻条件と連濁率

	前項末の音韻条件	連濁数	ゆれ数	非連濁数	連濁率
2拍前項の苗字	促音	0	0	1	0％
	濁音	1	0	13	7％
	ラ行音	2	1	8	20％
	引き音	3	0	5	38％
	ワ音	3	1	3	50％
	撥音	6	0	0	100％

さて、［表１］は連濁率の低いものからソートしてあるが、促音で終わっている場合は連濁しないというのは、例は少ないが現代の和語・漢語にも通じる傾向である。濁音終わりだと、連濁率が７％で、きわめて連濁しにくいのは、地名とも共通している。例外だったのは、「溝口」だけだった。２拍めラ行音の場合の連濁率は20％でかなり強い連濁抑制効果があり、地名では、ラ行狭母音ならさらに強く、連濁が抑制される結果になった。調査対象の「苗字」ではラ行狭母音は「堀河」「成瀬」「森川」「鳥飼」の４つしかなかったが、４冊の資料中３冊以上で連濁するとされた苗字はなかったが、「鳥飼」がトリカヒとトリガヒが２冊ずつで、当時の発音がゆれていたようである[10]。引き音やワ音の場合にも弱い連濁抑制効果があるようである。ここにあ

[10] ゆれているのは間違いないが、追加発音資料の赤澤編（1875）と奥川編（1875）はどちらもトリガヒと連濁形にしている。明治初年の状況としては、６冊全部で連濁が優勢となるが、現代の苗字では必ずしも連濁形が優勢ではないだろう。日外アソシエーツ編（2004）の３人の著名人では、非連濁形のトリカイが２人、連濁形のトリガイが１人になっている。ラ行狭母音の連濁抑制効果が現代の方が強く働いているという解釈もできると思われる。

げた種々の音韻条件に合致しない苗字の結果が「その他」で68％の連濁率で、引き音やワ音の場合は、これと比べれば、低めの連濁率を示している。最後に、撥音であるが、地名では少数派で、めったに撥音は現れないし、組み合わせも限られているが、苗字では藤原氏の派生苗字の「近藤」なども含めて[11]比較的多く見つかる。「安藤」「遠藤」「本多」「本荘」「新荘」「仙石」の６つである。撥音後のこれらの苗字は100％の連濁率だった。

調査方法と調査項目は同じではないが、２拍前項の明治期村名の調査結果と比較しておくことにする。［表２］は城岡（2018a）の［表５］の明治期村名データをまとめなおしたものである。

［表２］　地名の連濁を抑制する音韻条件と連濁率

	２拍前項の地名	調査前項数	連濁数	非連濁数	連濁率
全国の村名	２拍めが濁音	40	19	371	５％
	２拍めがラ行狭母音	23	32	222	13％
	２拍めが引き音（/R/）	6	79	356	18％
	２拍めがラ行音	39	153	576	21％
	２拍めがワ音（/wa/）	8	42	143	23％

村名の調査では促音や撥音（地名では苗字とことなり２拍めが撥音の地名はかなり珍しい）は調べていないが、濁音、ラ行狭母音、引き音、ラ行音は調べているが、ラ行音で21％の連濁率でかなり低くなっている、ワ音の場合も27％の連濁率でかなり低い。今回の苗字の連濁率と比較すると、引き音とワ音の場合苗字ではそれほど連濁が抑制されていないことが分かる。苗字の数が少ないせいで、例外の影響を強く受けているようにも思われるが、引き音とワ音の連濁抑制効果がそれほど強くなかった可能性もある。「大木」と「庭田」と「桑原」の場合を追加発音資料も加えて、［表３］にまとめておく。

［表３］　引き音とワ音の連濁抑制効果があまり発揮されていない例

苗字	山涯編 明６	河上編 明８	田中編 明８	書き込み本 出版年不明	赤澤編 明８	奥川編 明８
大木	非連濁	連濁	非連濁	非連濁	連濁	連濁
庭田	非連濁	連濁	連濁	非連濁	非連濁	連濁
桑原	連濁	連濁	非連濁	連濁	連濁	連濁

[11] 藤原氏の派生苗字の多くが音読みのトウを後項に使い、撥音後は必ず連濁する。調査対象以外でも、「近藤」「進藤」「新藤」「権藤」は連濁すると思われるが、撥音でなくとも連濁する場合があ

「大木」と「庭田」では連濁と非連濁がちょうど半々になっていて、前項の２拍めが引き音やワ音だからといって連濁が抑制されているとは思えない判断である。「桑原」の場合は、非連濁としたのが１冊だけなので、苗字では基本的に連濁だったと見るべきだろう。『地名索引』の全国の村名で大木村と庭田村と桑原村を探すと、村名では、苗字とはことなり、大木村（オホキ　7、オホギ　1）、庭田村（ニハタ　2、ニハダ　1）、桑原村（クハハラ 16、クハバラ 10）で、非連濁が優勢だった。次の２．４で苗字の連濁傾向の強さを村名との比較で確認するが、「大木」「庭田」「桑原」についてもあてはまるようだ。なお、現代の苗字の発音では、引き音やワ音の場合は、その後非連濁傾向が強くなっていることが、日外アソシエーツ（2004）で確認できる。「大木」では、９人の人物の記載があるが、連濁形のオオギは１人だけである。「庭田」は収録されていないが、「桑原」は、10人の人物で、クワハラが５人、クワバラが５人である。現代の記述の方が非連濁形の割合が多くなっているだろう。ということは、引き音やワ音の連濁抑制効果は、「苗字略」の時代には地名に比べてやや弱かったようであるが、現代では強くなっているということになる。

２．４　地名に比べて連濁傾向の強い苗字

連濁傾向の違いは、全体平均の連濁率の違いで確認できる（[表４]）。連濁可能後項と２拍前項をとる明治期村名の城岡（2018a：128）の調査[12]では、全体で33％の連濁率だった。今回の『単語篇』の連濁可能後項と２拍前項をとる苗字の連濁率は48％で、苗字の方が連濁率がかなり高かったことが確認できた。

[表４]　地名と苗字の連濁率

２拍前項＋連濁可能後項	全体の連濁率
村　　名	33％
苗　　字	48％

個々の具体的な苗字と地名の連濁率の違いを確認しておきたい。[表５] は、苗字の複合語後項が「サキ（﨑）」と「シマ（島、嶋、島）」と「クチ（口）」の場合について、追加発音資料も含めて６つの発音資料の記載が非連濁か、連濁かを調べ、連濁とした発音資料の割合を連濁率として出した。表中では、非連

る。「兵藤」では先行する引き音が関与しているのかもしれないし、「須藤」「首藤」「周藤」「工藤」では、狭母音の/u/と前項の先頭の無声子音が関連している可能性はある。先頭に無声子音のない「武藤」は連濁しない。「須藤」の場合は、ときに連濁せずにストウのように発音する場合があるが、日外アソシエーツ編（2004）では、スドウが６人、ストウが４人なので、優勢なのは連濁する方である。

[12] 村名調査では、13種の後項要素（木、田、津、戸、川、方［カタ］、坂、崎、島、谷、塚、橋、畑［ハタ］）に限定した調査を行っている。

濁と記述されている箇所は網かけで強調してある。そして、同一名称の明治期村名の発音を『地名索引』で調べ、連濁する村名数と非連濁の村名数を調べ、連濁率を出した[13]。なお、「小島村」ではコシマとヲシマの数を合算し、非連濁数とし、連濁数としてはコジマとヲジマの数を合算している。なお、割合を出す際には、マツガサキのように単純に非連濁形や連濁形と言えない語形と当該苗字未記載の場合は、分母から除外した。

［表５］「口」「崎」「島」「沢」を後項とする苗字と村名の連濁率

名称	『単語篇』の苗字							『地名索引』の村名
	山涯編 明６	河上編 明８	田中編 明８	書き込み本 出版年不明	赤澤編 明８	奥川編 明８	連濁率	連濁率
樋口	連濁	連濁	連濁	連濁	非連濁	連濁	83%	100%
山口	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	47%
川口	連濁	非連濁	連濁	連濁	連濁	非連濁	67%	50%
田口	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	75%
溝口	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	44%
岡﨑	連濁	連濁	連濁	連濁	－	非連濁	80%	50%
松﨑	連濁	連濁	(マツガサキ)	連濁	連濁	(マツガサキ)	100%	18%
岩﨑	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	0 %	4 %
山﨑	連濁	連濁	連濁	非連濁	連濁	連濁	83%	34%
副島(島)	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	－
寺島(島)	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	58%
高島(島)	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	－	非連濁	0 %	8 %
小島(島)	非連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	83%	35%
鍋島(島)	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	0 %	25%
大澤	非連濁	非連濁	非連濁	連濁	非連濁	非連濁	17%	4 %
戸澤	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	連濁	100%	0 %
柳澤	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	非連濁	0 %	0 %

[13] 表では連濁率だけ出しているが、非連濁数、連濁数の順番にデータを出しておく。フィールド区切り子としてコンマを使い、レコード区切り子としてスラッシュを使っている。樋口村,0,4/山口村,31,27/川口村,15,15/田口村,3,9/溝口村,5,4/岡﨑村,5,5/松﨑村,18,4/岩﨑村,27,1/山﨑村,31,16/副島村,0,0/寺島村,5,7/高島村,12,1/小島村,28,15/鍋島村,3,1/大澤村,45,2/戸澤村,4,0/柳澤村,8,0

結果を見ると、村名の連濁率よりも苗字の連濁率が高いところが多いことが分かる。17の名称のうち、13で苗字の方が連濁率が高くなっている。村名の方が連濁傾向が強かった場合にも薄い網掛けをしたが、「樋口」「岩﨑（崎）」「高島（島）」「鍋島（島）」の４か所である。これら４つの場合を詳しく見ると、発音資料の編者の一人が他の編者と違う判断をしたか、村名のひとつが他と違う連濁・非連濁だったかでこのような結果になっており、苗字の場合は、印刷ミスの可能性もあるし、村名の場合は、『地名索引』が連濁形と非連濁形を別の項目にしているので、印刷ミスの可能性はほとんどないが、例外的な村名の影響で、村名の方が苗字よりも連濁率が高くなっていると言える。連濁傾向の差が大きくなっている「鍋島（島）」の村名の連濁率が25％になったが、全国で４か村しかなく、そのひとつが連濁形だったということである。追加発音資料も含めて６冊の発音資料すべてが連濁形だった「山口」「田口」「溝口」「副島」「寺島」「戸澤」の対応村名の連濁率を見ても、差は大きく、村名の連濁率がかなり低くなっており、もっとも連濁率の高かった田口村で75％で、その次が寺島村の58％、その次が溝口村の44％である。溝口村の場合ならミゾクチ村の方が多いのに、苗字の発音はミゾグチしかなかったということになるだろう。戸澤村は全国に４か所しかなかったが、すべてトサハ（ワ）村だったが、苗字の方は６冊すべてトザハ（ワ）という判断だった。なお、「副島」は副島種臣の苗字として「苗字略」に採られたと思うが、明治期の村名にはなく、明治以前に苗字として確立していたのだろう[14]。

さて、現在、ヤマクチを名乗るひとをあまり見かけないと思うが[15]、それは、出身地がヤマクチ村でヤマグチを名乗るようになったひとがかなりいるためだと考えられる。カワクチ村出身者やオカサキ村出身者も同様だろう。苗字では非連濁の地名を連濁させる傾向があるのは、おそらく、現在まで続いている日本語の傾向だと言えるだろう。筆者は、城岡（2018：130、144）で、沖縄県の出身地が「新垣（アラカキ）」でも「新垣」を名乗るひとが他の地域ではアラガキと呼ばれるようになり（「垣」は地名でも苗字でも強い連濁傾向をもつ後項要素）、他の地域で活動を続けるならアラガキ[16]を名乗ることになるだろうと述べ

---

[14] 太田（1974：738）に「肥前の豪族」とある。

[15] 日外アソシエーツ編（2004）には９人の人物があり、ヤマグチという連濁形だけを載せている。日本ユニバック編（1978）にはヤマクチもあるが、非連濁形を名乗っているひとはかなり少数になっていると考えられる。

[16] 連濁・非連濁と関係はないが、読み方を大きく変更してニイガキと読ませることもあっただろう。

たが、おそらく、同じことは、明治期に国民の大多数が苗字を使いだしたときにも頻繁に起きたはずのことであり、苗字の非連濁形を捨て、連濁形を使いだしたひとたちがかなりいたのではないかと考えられる。

２．５　苗字の連濁・非連濁の分布の地域差や東西差について

一部の苗字の連濁・非連濁に東西差が関係している場合がある。苗字を扱った一般の書物の中には、西日本は非連濁の傾向、東日本が連濁の傾向と一般化する向きもある（小林 2014：42-49）。佐久間（1972）では、日本人の苗字で上位4000には、複数の発音がある場合、分布域についても記載しているが、連濁形・非連濁形について、「中島」ではナカシマが西日本、ナカジマが東日本、「山崎」ではヤマサキが西日本、ヤマザキが東日本、「塚越」ではツカコシが西日本、ツカゴシが東日本に分布すると書いている。他にも、非連濁形のアカホシ（赤星）やマツサキ（松崎）が多いのは九州で、東日本ではアカボシが多いとし、関東ではマツザキが多いと記載しているし、非連濁形のクワハラ（桑原）やタニカワ（谷川）が多いのは中国地方としている。小林（2014：44）は、発音は記載されないが、発音順に並べる現行の紙の電話帳を利用して、東日本と西日本のヤマザキとヤマサキを調べ、連濁形と非連濁形の割合を出している。高松市ではヤマサキが85％、広島市では93％、久留米市では95％、鹿児島市では89％だったとしている。東日本では数パーセントで、近畿の境市では中間的な割合で、ヤマサキが33％、ヤマザキが67％だったという。小林（2014：42）は「東日本では濁音が多く、西日本では清音が多くなるという不思議な法則」と述べ、情報の出所は明らかにしていないが[17]、「研究所」の発音でもケンキュウジョは東日本に多く、ケンキュウショは西日本に多いと述べている。

「松﨑（崎）」と「山口」、それから『単語篇』には含まれていないが、苗字の分布の東西差が指摘されることのある「中島」と「中田」を明治期の村名で調べ、村名として東西差が出て来るか調べたのが［表６］である。なお、東西の区分は、日本海側は新潟県までを東日本、太平洋側は三重県までを東とし、内陸の岐阜県は東日本に入れた。したがって、富山県、石川県、福井県、滋賀県、

[17] ネット上には東西の連濁傾向について類似の発言が多く見られ、NHK放送文化研究所のホームページ（https://www.nhk.or.jp/bunken/）には、柴田実氏の記事「発音の変化」（2001）では、「～所」の発音の固定化しているものとゆれているものの説明のあとで、「これらの『所』は、東日本では「ジョ」が多く聞かれ、西日本では「ショ」という清音が好まれているようです」と述べ、「阪神大震災の時の『避難所』は現地のかたからの要望で清音で発音する」ことにしたと説明している。

京都府、奈良県、和歌山県と以西の府県は西日本と分類した。

［表６］　明治期村名の連濁形と非連濁形の東西分布

『地名索引』による村名数

明治期村名		西　日　本	東　日　本
山　崎	ヤマサキ－ヤマザキ	18（72%）－ 7（28%）	13（59%）－ 9（41%）
松　崎	マツサキ－マツザキ	6（75%）－ 2（25%）	12（86%）－ 2（14%）
山　口	ヤマクチ－ヤマグチ	13（54%）－ 11（46%）	18（53%）－ 16（47%）
中　島	ナカシマ－ナカジマ	25（66%）－ 13（34%）	29（67%）－ 14（33%）
中　田	ナカター－ナカダ	5（31%）－ 11（69%）	6（40%）－ 9（60%）

結果を見ると、明治期村名の発音では、西日本に強い非連濁傾向があったとは認められない。「山崎」では西日本の方が非連濁傾向は強かったが、「松崎」と「中田」では東日本の方が非連濁傾向は強かったし、「山口」と「中島」は東西でほぼ同じ割合だった。苗字の連濁傾向の東西差に一定の傾向が見られるとしても、一般化がどれだけ有効なのかは、詳細に検討する必要があるということになる。

それなら、苗字の分布の差はどう考えるべきなのだろうか。地名と苗字の共存で説明できる場合がありそうである。［表７］は、現在の郵便番号簿に出ている地名で、ヤマサキとナカシマの分布を西日本と東日本で調べたもので、ヤマサキやナカシマという非連濁形の地名がひとつでもあれば分布域と分類した。

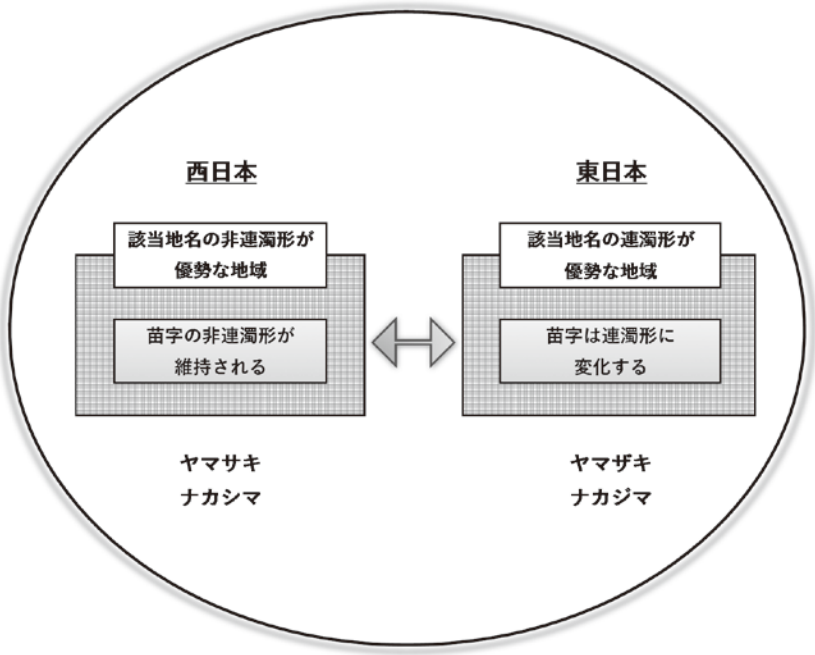
［表７］　地名の非連濁形ヤマサキとナカシマの現在の東西分布
（2017年の郵便番号簿の地名から）

	西　日　本	東　日　本
ヤマサキ地名（山崎）	福井県、京都府、奈良県、和歌山県、兵庫県、岡山県、広島県、香川県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県（１府14県）	宮城県、千葉県、神奈川県、山梨県（４県）
ナカシマ地名（中島）	大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、鳥取県、広島県、山口県、徳島県、福岡県、大分県、佐賀県、熊本県、宮崎県（１府12県）	岩手県、岐阜県、愛知県（３県）

西日本の地名で必ず非連濁形が維持されているわけではないことにも注意する必要があるだろう。「山口」をヤマクチと非連濁形で発音する地名は新潟県と岐阜県にしか残っていない。西日本はすべてヤマグチである。マツサキでも東

が４県、西が３県で、西日本が優勢というわけではない。ナカタ地名は明治期村名では東日本が優勢であったが、それは現代の郵便番号簿地名でも変わっていない。東日本の地名では10県に分布しているが、西日本では２府４県の分布で、中国や九州にはナカタは分布していない。

おそらく、地名でも苗字でも、単純に西日本が非連濁優勢ということは言えないと思われるが、特定の地名の非連濁形が優勢な地域では非連濁の苗字が維持され、逆に、該当地名の連濁形が優勢な地域では苗字の連濁形が優勢になるという関係は一般的に妥当するのではないかと思われる。「山崎」の例で言えば、地名にヤマサキが多く残っていれば、苗字のヤマサキも維持され、地名がヤマザキに変化してしまえば、苗字もヤマザキへと変化するという関係である。なぜ非連濁地名が優勢のまま維持される地域があり、一方、非連濁地名が連濁地名に変わってしまった地域があるのかは、今のところ、判断材料がないので、不明だ。比較的苗字の人口が多く、指摘されることの多いヤマサキとナカシマの地名と苗字の非連濁形の東西分布は次のように図示することができるだろう。



［図２］ 周囲の地名の連濁・非連濁と苗字の連濁・非連濁の影響関係

３．連濁・非連濁以外の苗字の形態的特徴から

「井上」と書いて、「井の上」と発音するのは現在でも普通だが、それは前項が１拍のときに限られ、２拍だと難しくなる。どうしてもノを入れたければいわゆる助字のノを入れて「丸の内」のように表記することになる。『単語篇』の苗字では、「竹腰」はタケノコシと発音していたようで、苗字が由来する地名もタケノコシである。このノが後に苗字では消えていく。苗字は地名のノを消す傾向が出て来るが、『単語篇』の苗字では、ノはかなり使われていたようだ。ノの問題について３．１で扱い、３．２では、逆に地名が変化していくが、苗字の発音に古い発音が残る場合があることから苗字と地名の違いを論じる。

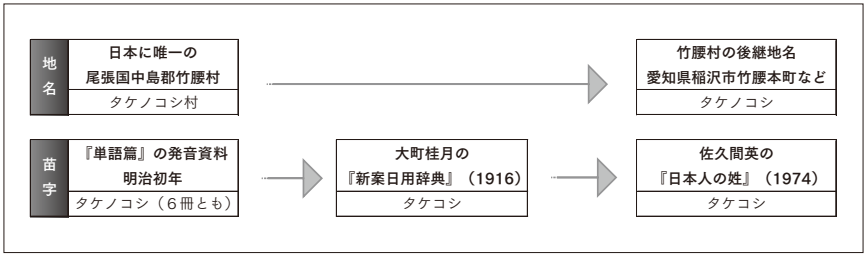
３．１　「竹ノ腰」のようなノを入れた発音と地名と苗字の違い

今日の苗字や地名は、助字のノを使うものが少なからずあるし、助字をつかわなくてもノを追加して発音する名称がかなりある。前項が１拍のものでは、「井上」や「木下」は２字の苗字でノを入れて発音するのが普通である。この二つは「苗字略」にも出て来るが、追加発音資料も含めて６冊の発音資料がヰノウヘとし、キノシタとしていた。明治期の地名でも助字は使わずにノを入れて発音する地名が現代に比べて多くあったことが、『地名索引』で確認できる。一方、現代人の苗字ではノの助字を使うものや助字を使わずに発音上ノを入れる苗字は、上記の「井上」や「木下」や「二宮」以外は、かなりまれである。「苗字略」の発音資料では、当時の地名よりもさらに頻繁にノを入れて発音していたようである。国民の大多数が苗字を使いだす以前には頻繁に使われたノであるが、現代に至る過程で消えている。明確な時期は分からないが、庶民は、地名にあるノを削除して苗字としたと推定することができそうである。「竹腰」という地名や苗字の発音がよい例である。「地名略」の発音資料は追加発音資料を含めて６冊全部がタケノコシとしている。タケコシとしているものは一冊もなかった。地名としては、尾張国中島郡に竹腰村があったが、『地名索引』では、やはり、タケノコシである[18]。「苗字略」の「竹腰」という苗字は、尾張藩の家老の家系で、華族の竹腰家の苗字を念頭においていた可能性が高いが、この家系では『単語篇』の発音資料の通りタケノコシを使っているようである（新人

[18] なお、現在、「竹越」という地名が名古屋市にあるが（千種区竹越タケコシ）、全国の他の地域にはこの地名はない。明治期の村名にもない。「猪子石村の字竹越による」（Wikipedia：2018年10月閲覧）ということらしい。苗字にも「竹越」があるが、この字名から来たものか不明。現代の「竹越」を名乗るひとの分布を日本ソフトのホームページ（注の２）で検索すると、人数は500人未満で、愛知県とは無関係の分布を示している。

物往来社 1997：294)。現代の多数派のタケコシという発音は、他に「竹腰」という村名はないのだから、竹腰村出身者が名乗ったはずであり[19]、元の地名の発音からノを削除して、名乗るようになったと考えられる。当初よりそのように名乗ったのか、途中で発音を変えたのかまでは分からない。ただ、一般的に地名に存在し、かつての苗字で頻用されたノの発音を現代の苗字では落とす傾向があることは指摘できるだろう。[図３] では、「竹腰」について、地名が変わらないのに、苗字がノを落とす傾向を図示したものである。大町（1916）は小型の実用国語辞典だが、代表的な姓や地名の発音が出ているのが特徴であり、「本書は地名人名も網羅せり」と凡例にある。著者個人の主観的判断だろうが、大正時代には「竹腰」はタケコシと考えられていたことが分かる。佐久間（1974）は各都道府県の教職員録などを中心に全国のデータを調査し、ランキングや分布や主な発音をまとめたものである。「竹腰」にタケコシとしか記載していない。

［図３］ 出身地がタケノコシで、苗字がタケコシへ
苗字の「竹腰」の発音の変化



なお、戦国時代には「竹腰」をタケゴシと発音する武将がすでにあったようである（阿部・西村 1990：480)。美濃国の斎藤氏の重臣で大垣城主と柳沢城主だった二人である。このタケゴシとタケノコシ村の関係はよく分からない。生命保険会社のデータを使い、現代の苗字の発音をかなりの程度網羅している『日本の苗字 表記編』(1978：274）の「竹腰」には、タケコシ、タケゴシ、タケノコシとあるから、タケノコシ村を経由しないタケゴシ（あるいはタケコシも）

[19] 現在の「竹腰」を名乗るひとの分布は、岐阜県がもっとも多く、富山県、愛知県、長野県の順番で続いている（日本ソフトのホームページで検索して確認した、注の２参照)。地名の「竹腰」のある愛知県にはそれほど多くなく、周辺県に多くの「竹腰」を苗字とするひとが分布していることになるが、このような分布は偶然ではなく、居住地ではなく、出身地が苗字に使われたためと考えられる。丹羽（1998：18-20）は、埼玉県に「黛」という地名があるが、全国に二か所しかなく（他の一か所は消失)、「黛」と名乗るひとはだいたいここが出身地だと考えられるが、ここには「黛」と同名のひとはいないという。居住地ではなく、出身地（故地）の名称をつける傾向が強かったためと説明している。

もあるのかもしれない。

『単語篇』に出て来る「竹内」と「山内」も６冊の発音資料（２冊の追加発音資料を含む）で、タケノウチとヤマノウチと記載していた。「竹内」も「山内」も、現在では、ノを削除した発音が使われるようになっていることは間違いなく、タケノウチ村出身者やヤマノウチ村出身者でもタケウチやヤマウチを名乗る場合がかなりあったことになるだろう。明治新姓の庶民が短縮形を使った可能性が高いと推定できる。ヤマウチの場合は、『地名索引』の村名でヤマウチの方が多かったにも関わらず、『単語篇』の発音資料がすべてヤマノウチとしているので、苗字としての語形は地名以上に「～ノウチ」の語形への嗜好があったのかもしれないし、『地名索引』で記録される村名がすでに江戸期にノを削除する変化をしていた可能性もあるだろう。［表８］は、追加発音資料２冊のデータも含めて、明治期村名と明治期の苗字と現在の苗字の発音の関係を表にしたものである。

［表８］「竹内」と「山内」の地名から苗字への変化

	地名索引 明18		単語篇発音資料 明治初年	大町1916	佐久間1972
竹　内	タケノウチ 10か村	タケウチ ２か村	タケノウチ 6 / 6	タケウチ	タケウチ
山　内	ヤマノウチ ７か村	ヤマウチ 14か村	ヤマノウチ 6 / 6	－	ヤマウチ ヤマノウチ

新人物往来社（1997）の「全華族一覧」を見ると、公家の竹内家ではタケノウチを使っているようだ。「山内」では、新旧華族の６家族が出てくるが、ヤマノウチが４家族で、高知の土佐藩主の山内家の一族でヤマウチとされているのが２家族である。これが事実なら、ヤマノウチからヤマウチと意識的に変えた例ということになる[20]。明治17年の華族令施行当時は華族では多数派がヤマノウチと発音していたことになるが、現在、ヤマウチと発音する「山内」が増えているのは、やはり、明治新姓の特徴で、「山内」を苗字とする国民の多くがヤマノウチをヤマウチと変える選択をしたものと考えられる。なお、江戸時代より古い苗字の読み方の定説がどの程度正確なのか筆者は判断できないが、阿部・

[20] 本稿の筆者の関心は、個々の家の事情ではなく、土佐藩主の山内家のどの系統がいつヤマウチになったかということではないが、森岡（1997：302）は藩主の大名家の記述として「この家は正しくは『やまのうち』と呼んでいたが、現在は『やまうち』を名乗っている」と書いている。なお、Wikipediaの「日本の華族一覧」（2018年閲覧）では、すべての旧土佐藩主に関係する叙爵者の苗字に「やまうち」という発音を使っている。

西村（1990：808-809）では、８人の「山内」を苗字とする人物が記載されているが、全員ヤマノウチである。

さて、［表８］に戻ろう。『単語篇』の発音資料でタケノウチと読んだ苗字の「竹内」の発音が大町（1916）ですでにタケウチになっており、佐久間（1972）でもタケウチしか挙げられていない。一方、郵便番号簿に記載の現代の地名では、助字の「の、ノ、之」を使うようなものも含めて、今だにタケノウチの方が優勢で、大阪府と京都府と全国の12県にタケノウチは分布しているが、タケウチは、明治期村名に比べれば、多少増えたのかもしれないが、６県に過ぎない。つまり、苗字のタケウチは地名とは無関係に苗字で発達した語形ということになるだろう。ヤマウチの場合も、苗字でヤマノウチからヤマウチへと変化した傾向があることは同様であるが、地名も苗字もタケノウチとタケウチの場合とは少し異なる経緯を経ている。まず、すでに明治期の村名でヤマウチの方が多かったが、ヤマノウチは現在の地名でも消えていない。地名のヤマノウチとヤマウチは、依然、拮抗している。つまり、ヤマノウチの方が地名では勢いを増していることになるだろう。苗字の方も、そのためか、佐久間（1972）では、現在でもヤマノウチという苗字使用者がかなりいることを示している。日外アソシエーツ（2004：208）の「山内」でもヤマウチと発音するひとが５人、ヤマノウチと発音するひとが５人掲載されている。苗字でノの発音が削除される傾向は、おそらく、広く見られることだと思われる。「堀内」の場合は、『単語篇』に収録されていないので、明治初年の苗字の発音は確認できないが、明治期の村名ではホリノウチがはるかに多かった。ホリノウチと発音する堀内村21か村、ホリウチと発音する堀内村が８か村であったが、他に堀之内村が14か村、堀野内村が１か村だ。これだけ多くのホリノウチ村があったわけだが、現在の「堀内」という苗字の発音はホリノウチとホリウチが拮抗するまでになっており、ホリノウチ村出身者でホリウチを使うようになったひとがかなりいると考えられる。佐久間（1972：165）では、苗字の「堀内」の発音としてホリウチとホリノウチをあげているが、優勢、劣勢や人口分布の記載はない。日外アソシエーツ（2004）には「堀内」を苗字とする10人の著名人が掲載されているが、ホリノウチ５人、ホリウチ５人である。

３．２　地名が変化して、苗字に古い発音が残る場合

『単語篇』の苗字が明治期の地名よりも連濁傾向が強いことを確認した。苗字の多くが地名由来であることを前提として考えるなら、苗字が元の地名の語形

を変化させて連濁させたと推定できる。しかし、それは、連濁という音韻変化に関してであり、連濁以外の語形に関しては、むしろ、苗字は古い語形を保存している場合が多いのではないかと思う。苗字は個人や家族が決定すれば、古い発音でも維持できるからである。ひとによっては、受け継いできたものを変えたくないということがあるだろう。他人からは読みにくいとか、間違えて呼ばれてしまうということを気にしなければそれほど困ることもないだろう。一方、地名の方は、個人の意思で左右できるものではなく、一般語彙と同じように、社会が語形を決めていると言える。地域差はあるし、複数の語形が容認される場合[21]もあると思うが、個人で勝手に別の発音を使えば、意思疎通に困難が出てくるだろう。苗字が古い発音を保存している場合について考えてみたい。

「苗字略」には「烏丸」が出て来るが、発音資料は6冊すべてカラスマルとしている。1．3で述べたように「苗字略」の収録苗字は華族が多く、カラスマルも華族の苗字と思われるが、この家系はカラスマルと発音している（新人物往来社 1997、藤裔会 1991：97）。現在の京都の地名では、「烏丸」はカラスマと発音している。烏丸通も烏丸町もカラスマと発音する。Wikipedia（2018年閲覧）に「平安遷都の当初はまだ字面通りに『からすまる』と読まれていたとみられる」と書いているが、間違いではないが、平安遷都の時代まで遡る必要はないようである。語形がいったん変化してしまうと、いつ変化したのか分からなくなるようだが、京都帝国大学地理学教室の教員がまとめた大正時代の地名の発音資料『市町村大字読方名彙』（小川 1923）がカラスマルとしているので、少なくとも正式名称として大正期にもカラスマルが京都で通用していたことが分かる。現代の京都の地名は変わってしまっているので、苗字の方が古い発音を維持している例だろう。

苗字が古い発音を維持して、地名の方が変化してしまっている場合の例が他にもある。『地名索引』では、岩城国の伊達郡がダテ、越後国中魚沼郡の伊達村

[21] 蔵王山の地元の山形市議会からの抗議を受けて、国土地理院の「蔵王山」の発音に連濁・非連濁が併記されることになった。滋賀県甲賀市も公式には「こうか」という発音を決定しているが、地元の学生に聞くと、「こうか」も「こうが」も使われているということだった。たとえば郵便番号簿などを考えると分かるが、複数の発音を容認するような地名の記述の慣用はなく、同一地名の複数の発音の資料はほとんど存在しない。しかし、このような例は連濁・非連濁以外にも「町」の発音の「まち」と「ちょう」の発音など、意外にあるのではないだろうか。複数の発音の可能性は地名にはあるが、苗字にはあてはまらないのではないかと思う。金田一（1976：1）は自分の苗字がキンタイチなのかキンダイチなのか分からないと書いているが、他人にどちらで呼ばれても気にならなかったのだろうが、ローマ字ではいちおうKindaichiと書いていると述べている。

もダテである。現在の郵便番号簿の地名に「伊達」をイダテと発音する地名はない。しかし、「苗字略」の発音資料の河上（1875）と赤澤（1875）はイダテとしていた。この語形は、苗字でも地名でも古い語形だと言われているので（丹羽 1981：229、吉田 1997：273)、イダテと記載した２冊は、編者の出身地で古い発音のイダテが使われていたか、編者にそういう発音の知り合いがいた可能性があるだろう。苗字「伊達」の現代の詳細な発音資料（『日本の苗字 表記篇』[22]、p.230）によると、「イタチ、イタテ、イダチ、イダテ、ダテ」とされている。したがって、大名家の伊達家はダテを使い、地名でも明治期以降ダテ以外は存在しなくなっているが、苗字では古い発音が維持される場合があることを苗字の「伊達」の発音が示している。

４．まとめと今後の課題

１では、明治初年の小学校教材である『単語篇』について紹介し、『単語篇』をもとに各地で作られた教材には発音を書いたものがあることを述べた。また、『単語篇』に含まれている「苗字略」の苗字が華族の苗字中心であり、平民苗字必称令以前に編集されていることに触れ、『単語篇』の発音資料は、国民の大多数が苗字を使いだす前の苗字の発音を示していることを述べた。

２では、筆者の明治期の村名の連濁・非連濁調査の結果と『単語篇』の苗字の結果を比較した。苗字の方が強い連濁傾向をもっていることを確認して、連濁を抑制する音韻条件について明治期村名調査の結果を利用して比較したが、地名と苗字は同じような条件で連濁が抑制されることを確認した。ただし、２拍めが引き音やワ音の場合は、当時の苗字ではあまり強くは連濁が抑制されていなかったことも確認した。苗字の前項末の引き音とワ音はその後連濁抑制効果を強めたようだ。

３では、『単語篇』の苗字の発音の調査をもとに、明治初年の連濁・非連濁以外の苗字の形態的特徴や現代までの通時的変化について述べた。苗字では「竹腰」をタケノコシからタケコシに変える傾向が顕著であるが、同様の傾向はある程度一般的に見られることを述べた。連濁傾向や「竹腰」のノの削除のような場合は、苗字の発音が地名から離れて変化していると考えられるが、その他の場合では、苗字の方が古い発音を維持する場合があることを指摘した。個人や家族で発音を決められる苗字は、社会が発音を決める一般語彙や地名とはこ

[22] コンピュータ企業の日本ユニバックが数人の苗字研究家と複数の生命保険会社の協力を得て、作成した苗字ファイルをもとにしている。

となる性格をもっていると言えるだろう。

最後に、本稿で十分に論じることのできなかった課題についても書き残しておくことにしよう。まず、『単語篇』の苗字で最後までどう解釈してよいのか分からなかったのが「武藤」である。最初に調べた4冊の発音資料でブトウが3冊、ムトウが1冊だった。「武士」の「武」という字を使っているのだから、ムという発音より、ブという発音の方が規則的ではあるだろう。当時の有名人の発音だった可能性も考えたが華族や過去の名の知られた武家にブトウという発音の記述は見つからなかった。そもそも濁音で始まる苗字は一般的に使われていないという点も考えあわせると、/b/と/m/が日本語では交替しやすいとしても、ブトウがこれだけ支持されているのは不可解である。ところが、その後、明治8年刊の追加発音資料の2冊も調べることになったが、こちらはどちらもムトウとしていた。こうなると、ブトウとした発音資料が3冊、ムトウとした発音資料が3冊ということになり、ゆれていたということになる。日外アソシエーツ（2004）で、実在の人物の苗字の発音を調べると、ムトウが9人、ブトウが1人、タケフジが1人になっている。ブトウからムトウに変化したと本当に言えるのか、類例も存在するのかなど、経緯と現象の解明は、今後の課題としたい。

412種の苗字（追加発音資料の2冊は『増補単語篇』なので、もっと多いはず）とその発音資料はこれまで苗字研究に利用されてきていないので、資料的価値のあるものだろう。とはいえ、明治初年の官員録などに掲載されている官吏の苗字に照らし合わせても苗字の数はとても十分な量とは言えない。他の適当な資料の発見が望まれる。しかし、苗字の連濁・非連濁の資料の発見は容易ではないことが予想される。明治19年に初版が出て、その後版を重ねた『大日本人名辞書』は実在の人物を多数集めており、規模が大きく、苗字の連濁・非連濁について正しく記載されていれば、資料として使えただろう。しかし、苗字の連濁・非連濁にはあまり注意を払っておらず、編者の判断でどちらかに決めて書いている場合がありそうである。例をあげると、掲載されている「山崎」という人物はすべてヤマサキになっていて、「中島」はナカジマ、「松崎」はマツザキ、「中田」はナカダ、「山口」はヤマグチとなっており[23]、編集者の考える標準的な発音の反映かもしれないが、苗字の連濁の資料にできるようなものではない。

[23] 昭和11年の新訂版が講談社学術文庫から復刻されているので、確認はこれを利用した。

参考文献

赤澤常道編（1875)、『増補単語篇』、甘泉堂。
阿部猛・西村圭子（1990)、『戦国人名事典コンパクト版』、新人物往来社。
井戸田博史（1986)、『「家」に探る苗字となまえ』、雄山閣。
太田亮（1974)、『新編姓氏家系辞書』丹羽基二編 秋田書店。1920年刊行のものの新編で、丹羽基二氏によって追加補註と補正が入れてある。
大町桂月（1916)、『新案日用辞典』、盛陽堂。
小川琢治編（1923)、『市町村大字読方名彙』、成象堂。
――（1925)、『日本地図帖地名索引』、成象堂。
奥川留吉編（1875)、『頭書増補単語篇 音訓附』、文江堂。
河上章編（1875)、『仮名附単語篇』、賛化堂。国立国会図書館デジタルコレクション所蔵。
金田一春彦（1976)、「連濁の解」、*Sophia Linguistica* 2、1-22。
佐久間英（1972)、『日本人の姓』、六藝書房。
櫻井豪人（2014)、『開成所単語集Ⅰ』、港の人。
山涯編（1873)、『仮名単語篇』、錦森堂。国立国会図書館デジタルコレクション所蔵。「山涯」は苗字と名に分かれるのか不明だし、発音も不明。
志摩達郎（1939)、『国民百科事典』、六合書院。
城岡啓二（2009)、「静岡県の地名と姓―名前の日本語を探検する―」『聞いてびっくり！日本語ゼミナール』、静岡大学人文学部、41-63。
――（2014a)、「明治時代以降の『～川』の連濁と非連濁について」、『人文論集』64号の１・２、静岡大学人文社会科学部、159-185。
――（2014b)、「オ・コ（小）とオー（大）が地名の連濁に与える影響について―明治期村名とその後の音変化から連濁・非連濁の傾向と規則性を読み取る―」『人文論集』65号の１、静岡大学人文社会科学部、27-62。
――（2015)、「複合語前項の長さの連濁への関与について―固有名詞、一般語彙、和語、漢語―」『人文論集』66号の１、静岡大学人文社会科学部、137-167。
――（2017)、「３拍前項をもつ明治期村名の連濁を抑制する音韻条件について―濁音、鼻音、ラ行音、狭母音、無声子音音素数との関連―」『人文論集』68号の１、静岡大学人文社会科学部、83-113。
――（2018a)、「２拍前項をもつ明治期村名の連濁と非連濁に関与する諸条件について―現代の地名への変遷までを視野に入れて―」『人文論集』68号の２、

静岡大学人文社会科学部、127-148。
――（2018b）、「１拍前項をもつ全国の地名の連濁と非連濁について―明治期村名の調査結果を踏まえて―」『人文論集』69号の１、静岡大学人文社会科学部、89-118。
新人物往来社（1997）、「全華族一覧」『日本「名家・名門」総覧』、別冊歴史読本98、223-307。
高木まさき（1993）、「『単語篇』の研究」『国語科教育』40巻、147-154。
田中明（2014）、『なぜ「田中」さんは西日本に多いのか』、日本経済新聞出版社。
田中鼎編（1875）、『音訓仮名附単語篇』、里鶏堂。
角田文衛（1988）、『日本の女性名（下）』、教育社。
藤裔会編（1991）、『藤原氏族姓氏一覧』。
日外アソシエーツ編（1994）、『増補改訂人名よみかた辞典 姓の部』。
――（2004）、『人名よみかた辞典 姓の部 新訂第３版』。
日本ユニバック編（1978）、『日本の苗字』表音編、表記編、日本経済新聞社。
丹羽基二（1981）、『姓氏の語源』、角川書店。
――（1998）、『知ってなるほど苗字の謎』、小学館。
内務省地理局編（1881）、『郡区町村一覧』。ゆまに書房版（復刻版、1985）。
――（1885）、『地名索引』。雄松堂版（1967）、名著出版版（1973）、ゆまに書房版（1985）の３種の復刻版がある。
森岡浩（1997）、『全国名字辞典』、東京堂。
吉田茂樹（1997）、『日本歴史地名事典コンパクト版』、新人物往来社。

【付 録】

連濁・非連濁の調査対象とした174の苗字の４つの発音資料のデータを示す。連番、山涯編（明６）、河上章編（明８）、田中鼎編（明８）、詳細不明本の順で示す。フィールドの区切りは半角のコンマ、レコード区切りは半角のスラッシュである。同一資料に複数の発音が記載されている場合は、ほとんどなかったが、半角の＆で結合して記載してある。印刷不鮮明で読み取れない箇所は?を入れた。漢字表記は、文部省編の『官版単語篇』のものをできるだけ再現するようにした。「島」は「嶋」と書かれているが、発音資料の中には「嶋」をつかっているものや「島」を使っているものもあった。カタカナはできるだけオリジナルのものを再現した。小書き文字は使用されていないので、促音や拗音の表記が現代とはことなるし、繰返し記号（ヽやゞ）の使い方も現代とはことなる。

また、河上（1875）はガ行鼻濁音を『単語篇』が導入しようとしていた半濁音として記述しているようで、通常の２個の点ではなく、１個の点で濁点を表しているが（「ツガル」には２個の点が使われ、「ヲカザキ」に１個の点が使われるなど、混乱もまれに見られる）、これは再現できなかった。

1,鷹司,ﾀｶﾂｶｻ,ﾀｶﾂｶｻ,ﾀｶﾂｶｻ,ﾀｶﾂｶｻ/2,醍醐,ﾀﾞｲｺﾞ,ﾀﾞｲｺﾞ,ﾀﾞｲｺﾞ,ﾀﾞｲｺﾞ/3,菊亭,ｷｸﾃｲ,ｷｸﾃｲ,ｷｸﾃｲ,ｷｸﾃｲ/4,小倉,ｦｸﾞﾗ,ｦｸﾞﾗ,ｦｸﾞﾗ,ｦｸﾞﾗ/5,河鰭,ｶﾊﾊﾞﾀ,ｶﾊﾊﾞﾀ,ｶﾊﾊﾞﾀ,ｶﾊﾊﾞﾀ/6,梅園,ｳﾒｿﾞﾉ,ｳﾒｿﾞﾉ,ｳﾒｿﾞﾉ,ｳﾒｿﾞﾉ/7,風早,ｶｻﾞﾊﾔ,ｶｻﾞﾊﾔ,ｶｻﾞﾊﾔ,ｶｻﾞﾊﾔ/8,中園,ﾅｶｿﾞﾉ,ﾅｶｿﾞﾉ,ﾅｶｿﾉ,ﾅｶｿﾞﾉ/9,難波,ﾅﾆﾊ,ﾅﾆﾊ,ﾅﾝﾊﾞ,ﾅﾝﾊﾞ/10,今城,ｲﾏｷﾞ,ｲﾏｷﾞ,ｲﾏｷﾞ,ｲﾏｷ/11,東園,ﾋｶﾞｼｿﾞﾉ,ﾋｶﾞｼｿﾞﾉ,ﾋｶﾞｼｿﾞﾉ,ﾋｶﾞｼｿﾞﾉ/12,壬生,ﾐﾌﾞ,ﾐﾌﾞ,ﾐﾌﾞ,ﾐﾌﾞ/13,六角,ﾛｸｶｸ,ﾛｸｶｸ,ﾛｯｶｸ,ﾛｸｶｸ/14,冷泉,ﾚｲｾﾞｲ,ﾚｲｾﾞｲ,ﾚｲｾﾞｲ,ﾚｲｾﾞｲ/15,藤谷,ﾌｼﾞﾀﾆ,ﾌｼﾞﾀﾞﾆ,ﾌｼﾞﾀﾆ,ﾌｼﾞﾀﾆ/16,廣橋,ﾋﾛﾊｼ,ﾋﾛﾊｼ,ﾋﾛﾊｼ,ﾋﾛﾊｼ/17,柳原,ﾔﾅｷﾞﾜﾗ,ﾔﾅｷﾊﾗ,ﾔﾅｷﾞﾊﾗ,ﾔﾅｷﾞﾊﾗ/18,池尻,ｲｹｼﾞﾘ,ｲｹｼﾞﾘ,ｲｹｶﾞﾐ,ｲｹｶﾞﾐ/19,岡﨑,ｦｶｻﾞｷ,ｦｶｻﾞｷ,ｦｶｻﾞｷ,ｵｶｻﾞｷ/20,山科,ﾔﾏｼﾅ,ﾔﾏｼﾅ,ﾔﾏｼﾅ,ﾔﾏｼﾅ/21,松﨑,ﾏﾂｻﾞｷ,ﾏﾂｻﾞｷ,ﾏﾂｶﾞｻｷ,ﾏﾂｻﾞｷ/22,櫛笥,ｸｼｹﾞ,ｸｼｹﾞ,ｸｼｹﾞ,ｸｼｹﾞ/23,町尻,ﾏﾁｼﾞﾘ,ﾏﾁｼﾞﾘ,ﾏﾁｼﾞこはたﾘ,ﾏﾁｼﾞﾘ/24,高倉,ﾀｶｸﾗ,ﾀｶｸﾗ,ﾀｶｸﾗ,ﾀｶｸﾗ/25,堀河,ﾎﾘｶﾊ,ﾎﾘｶﾊ,ﾎﾘｶﾊ,ﾎﾘｶﾊ/26,樋口,ﾋｸﾞﾁ,ﾋｸﾞﾁ,ﾋｸﾞﾁ,ﾋｸﾞﾁ/27,本多,ﾎﾝﾀﾞ,ﾎﾝﾀﾞ,ﾎﾝﾀﾞ,ﾎﾑﾀﾞ/28,藤田,ﾌﾁﾞﾀ,ﾌﾁﾞﾀ,ﾌﾁﾞﾀ,ﾌﾁﾞﾀ/29,高木,ﾀｶｷﾞ,ﾀｶｷﾞ,ﾀｶｷﾞ,ﾀｶｷﾞ/30,八代,ﾔｼﾛ,ﾔｼﾛ,ﾔﾂｼﾛ,ﾔﾂｼﾛ/31,本荘,ﾎﾝｼﾞｬｳ,ﾎﾝｼﾞｬｳ,ﾎﾝｼﾞｬｳ,ﾎﾝｼﾞｬｳ/32,富田,ﾄﾐﾀ,ﾄﾐﾀ,ﾄﾐﾀﾞ,ﾄﾐﾀ/33,吉田,ﾖｼﾀﾞ,ﾖｼﾀﾞ,ﾖｼﾀﾞ,ﾖｼﾀﾞ/34,小幡,ｦﾊﾞﾀ,ｦﾊﾞﾀ,ｦﾊﾀ,ｦﾊﾞﾀ/35,大淵,ｦﾚﾌﾞﾁ,ｦﾎﾌﾁ,ｦﾎﾌﾞﾁ,ｵﾎﾌﾞﾁ/36,奥平,ｵｸﾀﾞｲﾗ,ｵｸﾀﾞﾋﾗ,ｵｸﾀﾞﾋﾗ,ｵｸﾀﾞﾋﾗ/37,武藤,ﾑﾄｳ,ﾌﾞﾄｳ,ﾌﾞﾄｳ,ﾌﾞﾄｳ/38,那須,ﾅｽ,ﾅｽ,ﾅｽ,ﾅｽ/39,佐藤,ｻﾄﾌ,ｻﾄｳ,ｻﾄｳ,ｻﾄｳ/40,松田,ﾏﾂﾀﾞ,ﾏﾂﾀﾞ,ﾏﾂﾀﾞ,ﾏﾂﾀﾞ/41,後藤,ｺﾞﾄｳ,ｺﾞﾄｳ,ｺﾞﾄｳ,ｺﾞﾄｳ/42,内藤,ﾅｲﾄﾌ,ﾅｲﾄｳ,ﾅｲﾄｳ,ﾅｲﾄｳ/43,成瀬,ﾅﾙｾ,ﾅﾙｾ,ﾅﾙｾ,ﾅﾙｾ/44,皆川,ﾐﾅｶﾞﾊ,ﾐﾅｶﾞﾊ,ﾐﾅｶﾊ,ﾐﾅｶﾞﾊ/45,蒲生,ｶﾞﾓﾌ,ｶﾞﾏﾌ,ｶﾞﾏﾌ,ｶﾞﾏﾌ/46,新荘,ｼﾝｼﾞｬｳ,ｼﾝｼﾞｬｳ,ｼﾝｼﾞｬｳ,ｼﾝｼﾞｬｳ/47,板垣,ｻｶｶﾞｷ,ｲﾀｶﾞｷ,ｲﾀｶﾞｷ,ｲﾀｶﾞｷ/48,土方,ﾋﾁﾞｶﾀ,ﾋﾁﾞｶﾀ,ﾋﾁﾞｶﾀ,ﾋﾁﾞｶﾀ/49,江藤,ｴﾄﾌ,ｴﾄｳ,ｴﾄｳ,ｴﾄﾞｳ/50,副島,ｿﾊﾞｼﾞﾏ,ｿﾋｼﾞﾏ,ｿﾍｼﾞﾏ,ｿﾍｼﾞﾏ/51,寺島,ﾃﾗｼﾞﾏ,ﾃﾗｼﾞﾏ,ﾃﾗｼﾞﾏ,ﾃﾗｼﾞﾏ/52,山口,ﾔﾏｸﾞﾁ,ﾔﾏｸﾞﾁ,ﾔﾏｸﾞﾁ,ﾔﾏｸﾞﾁ/53,伊藤,ｲﾄﾌ,ｲﾄｳ,ｲﾄｳ,ｲﾄｳ/54,徳川,ﾄｸｶﾞﾊ,ﾄｸｶﾊ,ﾄｸｶﾞﾊ,ﾄｸｶﾞﾊ/55,松平,ﾏﾂﾀﾞｲﾗ,ﾏﾂﾀﾞﾋﾗ,ﾏﾂﾀﾋﾗ,ﾏﾂﾀﾞﾋﾗ/56,細川,ﾎｿｶﾊ,ﾎｿｶﾊ,ﾎｿｶﾊ,ﾎｿｶﾊ/57,一色,ｲｯｼｷ,ｲｯｼｷ,ｲｯｼｷ,ｲｯｼｷ/58,保田,ﾔｽﾀﾞ,ﾔｽﾀﾞ,ﾔｽﾀﾞ,ﾎﾀﾞ/59,渋川,ｼﾌﾞｶﾊ,ｼﾌﾞｶﾊ,ｼﾌﾞｶﾊ,ｼﾌﾞｶﾊ/60,宍戸,ｼﾝﾄﾞ,ｼﾝﾄﾞ,ｼ?,ｼﾝﾄﾞ/61,武田,ﾀｹﾀﾞ,ﾀｹﾀﾞ,ﾀｹﾀ,ﾀｹﾀﾞ/62,多田,ﾀﾞ,ﾀﾞ,ﾀﾀﾞ,ﾀﾀﾞ/63,上田,ｳｴﾀﾞ,ｳﾍﾀﾞ,ｳﾍﾀﾞ,ｳﾍﾀﾞ/64,安藤,ｱﾝﾄﾞﾌ,ｱﾝﾄﾞｳ,ｱﾝﾄﾞｳ,ｱﾑﾄﾞｳ/65,島津,ｼﾏﾂﾞ,ｼﾏﾂﾞ,ｼﾏﾂﾞ,ｼﾏﾂﾞ/66,佐竹,ｻﾀｹ,ｻﾀｹ,ｻﾀｹ,ｻﾀｹ/67,大澤,ｵﾝｻﾊ,ｵﾎｻﾊ,ｵﾎｻﾊ,ｵﾎｻﾞﾊ/68,太田,ｵﾝﾀ,ｵﾎﾀ,ｵﾎﾀ,ｵﾎﾀ/69,土岐,ﾄｷ,ﾄｷ,ﾄｷ,ﾄｷ/70,池田,ｲｹﾀﾞ,ｲ

ｹﾀﾞ,ｲｹﾀﾞ,ｲｹﾀﾞ/71,庭田,ﾆﾜﾀ,ﾆﾊﾀﾞ,ﾆﾊﾀﾞ,ﾆﾊﾀ/72,大原,ｵﾊﾗ,ｵﾎﾊﾗ,ｵﾎﾊﾗ,ｵﾎﾊﾗ/73,大木,ｵﾊｷ,ｵﾎｷﾞ,ｵﾎｷ,ｵﾎｷ/74,伊丹,ｲﾀﾐ,ｲﾀﾐ,ｲﾀﾐ,ｲﾀﾐ/75,松下,ﾏﾂｼﾀ,ﾏﾂｼﾀ,ﾏﾂｼﾀ,ﾏﾂｼﾀ/76,朽木,ｸﾂｷ,ｸﾁｷ,ｸﾂｷ,ｸﾂｷ/77,高島,ﾀｶｼﾏ,ﾀｶｼﾏ,ﾀｶｼﾏ,ﾀｶｼﾏ/78,京極,ｷﾔｳｺｸ,ｷﾔｳｺﾞｸ,ｷﾔｺﾞｸ,ｷﾔｳｺﾞｸ/79,黒田,ｸﾛﾀﾞ,ｸﾛﾀﾞ,ｸﾛﾀﾞ,ｸﾛﾀﾞ/80,尼子,ｱﾏｺ,ｱﾏｺ,ｱﾏｺ,ｱﾏｺﾞ/81,小島,ﾖｼﾏ,ｺｼﾞﾏ,ｺｼﾞﾏ,ｺｼﾞﾏ/82,岩倉,ｲﾊｸﾗ,ｲﾊｸﾗ,ｲﾊｸﾗ,ｲﾊｸﾗ/83,千種,ﾁｸｻ,ﾁｸｻ,ﾁｸｻ,ﾁｸｻ/84,久世,ｸｾﾞ,ｸｾﾞ,ｸｾﾞ,ｸｾﾞ/85,梅渓,ｳﾒﾀﾆ,ｳﾒﾀﾞﾆ,ｳﾒﾀﾞﾆ,ｳﾒﾀﾞﾆ/86,萩原,ﾊｷﾞﾜﾗ,ﾊｷﾞﾊﾗ,ﾊｷﾞﾊﾗ,ﾊｷﾞﾊﾗ/87,那波,ﾅﾊﾞ,ﾅﾊﾞ,ﾅﾊ,ﾅﾊﾞ/88,北畠,ｷﾀﾊﾞﾀｹ,ｷﾀﾊﾀｹ,ｷﾀﾊﾞﾀｹ,ｷﾀﾊﾞﾀｹ/89,福羽,ﾌｸﾊ,ﾌｸﾊ,ﾌｸﾊﾞ,ﾌｸﾊﾞ/90,白河,ｼﾗｶﾊ,ｼﾗｶﾊ,ｼﾗｶﾊ,ｼﾗｶﾊ/91,廣幡,ﾋﾛﾊﾀ,ﾋﾛﾊﾀ,ﾋﾛﾊﾀ,ﾋﾛﾊﾀ/92,唐橋,ｶﾗﾊｼ,ｶﾗﾊｼ,ｶﾗﾊｼ,ｶﾗﾊｼ/93,前田,ﾏｲﾀﾞ,ﾏﾍﾀﾞ,ﾏﾍﾀﾞ,ﾏﾍﾀﾞ/94,大隈,ｵﾊｸﾏ,ｵﾎｸﾏ,ｵﾎｸﾏ,ｵﾎｸﾏ/95,船橋,ﾌﾅﾊﾞｼ,ﾌﾅﾊｼ,ﾌﾅﾊﾞｼ,ﾌﾅﾊﾞｼ/96,伏原,ﾌｾﾊﾗ,ﾌｾﾊﾗ,ﾌ?ﾊﾗ,ﾌｼﾊﾗ/97,小畠,ｺﾊﾞﾀｹ,ｺﾊﾀｹ,ﾖﾊﾀｹ&ﾖ?ﾀ,ﾖﾊﾀ/98,岩﨑,ｲﾊｻｷ,ｲﾊｻｷ,ｲﾊｻｷ,ｲﾊｻｷ/99,梶原,ｶｼﾞﾊﾗ,ｶｼﾞﾊﾗ,ｶｼﾞﾊﾗ,ｶｼﾞﾊﾗ/100,千葉,ﾁﾊﾞ,ﾁﾊﾞ,ﾁﾊﾞ,ﾁﾊﾞ/101,正木,ﾏｻｷ,ﾏｻｷ,ﾏｻｷ,ﾏｻｷ/102,織田,ﾖﾀ,ｵﾀﾞ,ｵﾀﾞ,ｵﾀﾞ/103,津田,ﾂﾀﾞ,ﾂﾀﾞ,ﾂﾀﾞ,ﾂﾀ/104,梶川,ｶｼﾞｶﾊ,ｶｼﾞｶﾊ,ｶｼﾞｶﾊ,ｶｼﾞｶﾊ/105,杉原,ｽｷﾞﾊﾗ,ｽｷﾞﾊﾗ,ｽｷﾞﾊﾗ,ｽｷﾞﾊﾗ/106,遠藤,ｴﾝﾄﾞｳ,ｴﾝﾄﾞｳ,ｴﾝﾄﾞｳ,ｴﾝﾄﾞｳ/107,戸澤,ﾄｻﾞﾊ,ﾄｻﾞﾊ,ﾄｻﾞﾊ,ﾄｻﾞﾊ/108,小栗,ﾖｸﾞﾘ,ﾖｸﾞﾘ,ﾖｸﾞﾘ,ﾖｸﾞﾘ/109,仁科,ﾆｼﾅ,ﾆｼﾅ,ﾆｼﾅ,ﾆｼﾅ/110,岩城,ｲﾊｷ,ｲﾊｷ,ｲﾊｷ,ｲﾊｷ/111,錦織,ﾆｼｷﾞｺﾞﾘ,ﾆｼｺﾞﾘ,ﾆｼｺﾞﾘ,ﾆｼｺﾞﾘ/112,倉橋,ｸﾗﾊｼ,ｸﾗﾊｼ,ｸﾗﾊｼ,ｸﾗﾊｼ/113,秋田,ｱｷﾀ,ｱｷﾀ,ｱｷﾀ,ｱｷﾀ/114,秋月,ｱｷﾂﾞｷ,ｱｷﾂﾞｷ,ｱｷﾂﾞｷ,ｱｷﾂﾞｷ/115,堀田,ﾎｯﾀ,ﾎﾘﾀ,ﾎﾘﾀ,ﾎｯﾀ/116,鈴木,ｽﾞｷ,ｽﾝｷ,ｽﾞｷ,ｽﾞｷ/117,木戸,ｷﾄﾞ,ｷﾄﾞ,ｷﾄﾞ,ｷﾄ/118,山﨑,ﾔﾏｻﾞｷ,ﾔﾏｻﾞｷ,ﾔﾏｻﾞｷ,ﾔﾏｻｷ/119,石川,ｲｼｶﾊ,ｲｼｶﾊ,ｲｼｶﾊ,ｲｼｶﾊ/120,横瀬,ﾖｺｾ,ﾖｺｾﾞ,ﾖｺｾ,ﾖｺｾﾞ/121,朝倉,ｱｻｸﾗ,ｱｻｸﾗ,ｱｻｸﾗ,ｱｻｸﾗ/122,稲葉,ｲﾅﾊﾞ,ｲﾅﾊﾞ,ｲﾅﾊﾞ,ｲﾅﾊﾞ/123,内田,ｳﾁﾀﾞ,ｳﾁﾀﾞ,ｳﾁﾀﾞ,ｳﾁﾀﾞ/124,望月,ﾓﾁﾂﾞｷ,ﾓﾁﾂﾞｷ,ﾓﾁﾂﾞｷ,ﾓﾁﾂﾞｷ/125,真田,ｻﾅﾀﾞ,ｻﾅﾀﾞ,ｻﾅﾀﾞ,ｻﾅﾀﾞ/126,蜷川,ﾆﾅｶﾞﾊ,ﾆﾅｶﾞﾊ,ﾆﾅｶﾊ,ﾆﾅｶﾞﾊ/127,岡田,ﾖｶﾀﾞ,ﾖｶﾀﾞ,ﾖｶﾀﾞ,ﾖｶﾀﾞ/128,坂田,ｻｶﾀ,ｻｶﾀ,ｻｶﾀ,ｻｶﾀ/129,井戸,ｲﾄﾞ,ｲﾄﾞ,ｲﾄﾞ,ｲﾄﾞ/130,青木,ｱﾖｷ,ｱﾖｷ,ｱﾖｷ,ｱﾖｷ/131,小川,ﾖｶﾞﾊ,ﾖｶﾞﾊ,ﾖｶﾞﾊ,ﾖｶﾞﾊ/132,川口,ｶﾊｸﾞﾁ,ｶﾊｸﾁ,ｶﾊｸﾞﾁ,ｶﾊｸﾞﾁ/133,高橋,ﾀｶﾊｼ,ﾀｶﾊｼ,ﾀｶﾊｼ,ﾀｶﾊｼ/134,田口,ﾀｸﾞﾁ,ﾀｸﾞﾁ,ﾀｸﾞﾁ,ﾀｸﾞﾁ/135,長鹽,ﾅｶﾞｼｵ,ﾅｶﾞｼｵ,ﾅｶﾞｼｵ,ﾅｶﾞｼｵ/136,丹羽,ﾆﾊ,ﾆﾊ,ﾆﾊ,ﾆﾊ/137,益田,ﾏｽﾀﾞ,ﾏｽﾀﾞ,ﾏｽﾀﾞ,ﾏｽﾀﾞ/138,田尻,ﾀｼﾞﾘ,ﾀｼﾞﾘ,ﾀｼﾞﾘ,ﾀｼﾞﾘ/139,大給,ﾀﾞｲｷﾌ,ｵﾎｷﾌ,ｵｷﾞﾌ,ｵﾎﾀﾍﾞ/140,鵜殿,ｳﾄﾞﾉ,ｳﾄﾞﾉ,ｳﾄﾞﾉ,ｳﾄ/141,中川,ﾅｶｶﾞﾊ,ﾅｶｶﾞﾊ,ﾅｶｶﾞﾊ,ﾅｶｶﾞﾊ/142,柳澤,ﾔﾅｷﾞｻﾊ,ﾔﾅｷﾞｻﾊ,ﾔﾅｷﾞｻﾊ,ﾔﾅｷﾞｻﾊ/143,鳥飼,ﾄﾘｶﾋ,ﾄﾘｶﾞﾋ,ﾄﾘｶﾞﾋ,ﾄﾘｶﾋ/144,稲垣,ｲﾅｶﾞｷ,ｲﾅｶﾞｷ,ｲﾅｶﾞｷ,ｲﾅｶﾞｷ/145,生駒,ｲｺﾏ,ｲｺﾏ,ｲｺﾏ,ｲｺﾏ/146,蒔田,ﾏｷﾀ,ﾏｷﾀﾞ,ﾏﾋﾀ&ﾏｷﾀ,ﾏｲﾀ/147,片桐,ｶﾀｷﾞﾘ,ｶﾀｷﾞﾘ,ｶﾀｷﾞﾘ,ｶﾀｷﾞﾘ/148,森川,ﾓﾘｶﾊ,ﾓﾘｶﾊ,ﾓﾘｶﾊ,ﾓﾘｶﾊ/149,柳生,ﾔｷﾞﾌ,ﾔｷﾞﾌ,ﾔｷﾞﾌ,ﾔｷﾞﾌ/150,米倉,ﾖ子ｸﾞﾗ,ﾖﾈｸﾞﾗ,ﾖﾈｸﾗ,ﾖﾈｸﾗ/151,大関,ｵﾊｾﾞｷ,ｵﾎｾﾞｷ,ｵﾎｾﾞｷ,ｵﾎｾﾞｷ/152,米津,ﾖ子ｷﾂﾞ,ﾖﾈﾂﾞ,ﾖﾈｷﾂﾞ&ﾖﾈﾂﾞ,ﾖﾈﾂﾞ

/153,保科,ﾎｼﾅ,ﾎｼﾅ,ﾎｼﾅ,ﾎｼﾅ/154,仙石,ｾﾝｺﾞｸ,ｾﾝｺﾞｸ,ｾﾝｺﾞｸ,ｾﾑｺﾞｸ/155,竹腰,ﾀｹﾉｺｼ,ﾀｹﾉｺｼ,ﾀｹﾉｺｼ,ﾀｹﾉｺｼ/156,板倉,ｲﾀｸﾗ,ｲﾀｸﾗ,ｲﾀｸﾗ,ｲﾀｸﾗ/157,五島,ｺﾞﾀｳ,ｺﾞﾀｳ,ｺﾞﾀｳ,ｺﾞﾀｳ/158,伊東,ｲﾄｳ,ｲﾄｳ,ｲﾄｳ,ｲﾄｳ/159,九鬼,ｸｷ,ｸｷ,ｸｷ,ｸｷ/160,市橋,ｲﾁﾊｼ,ｲﾁﾊｼ,ｲﾁﾊｼ,ｲﾁﾊｼ/161,桑原,ｸﾜﾊﾞﾗ,ｸﾊﾞﾗ,ｸﾊﾊﾗ,ｸﾊﾊﾞﾗ/162,花園,ﾊﾅｿﾞﾉ,ﾊﾅｿﾞﾉ,ﾊﾅｿﾞﾉ,ﾊﾅｿﾞﾉ/163,諏訪,ｽﾊ,ｽﾊ,ｽﾊ,ｽﾊ/164,松木,ﾏﾂｷﾞ,ﾏﾂﾉｷ,ﾏﾂｷ,ﾏﾂﾉｷ/165,鍋島,ﾅﾍﾞｼﾏ,ﾅﾍﾞｼﾏ,ﾅﾍﾞｼﾏ,ﾅﾍﾞｼﾏ/166,戸田,ﾄﾀﾞ,ﾄﾀﾞ,ﾄﾀﾞ,ﾄﾀﾞ/167,立花,ﾀﾁﾊﾞﾅ,ﾀﾁﾊﾞﾅ,ﾀﾁﾊﾞﾅ,ﾀﾁﾊﾞﾅ/168,榊原,ｻｶｷﾊﾞﾗ,ｻｶｷﾊﾗ,ｻｶｷﾊﾞﾗ,ｻｶｷﾊﾞﾗ/169,脇坂,ﾜｷｻﾞｶ,ﾜｷｻﾞｶ,ﾜｷｻｶ,ﾜｷｻﾞｶ/170,津軽,ﾂｶﾞﾙ,ﾂｶﾞﾙ,ﾂｶﾞﾙ,ﾂｶﾞﾙ/171,溝口,ﾐｿﾞｸﾞﾁ,ﾐｿﾞｸﾞﾁ,ﾐｿﾞｸﾞﾁ,ﾐｿﾞｸﾞﾁ/172,加藤,ｶﾄｳ,ｶﾄｳ,ｶﾄｳ,ｶﾄｳ/173,山縣,ﾔﾏｶﾞﾀ,ﾔﾏｶﾞﾀ,ﾔﾏｶﾞﾀ,ﾔﾏｶﾞﾀ/174,和田,ﾜﾀﾞ,ﾜﾀﾞ,ﾜﾀﾞ,ﾜﾀﾞ